

[エッセイ]

私たちのドイツ留学体験記

島田亮佑：ドイツと日本

これはおそらく私に限らず、海外を訪れたほとんどの人が思い当たることだろう。ゲッティンゲンへの一年間の留学中に、私は事あるごとにドイツという国と日本とを比較していた。優劣を定めようというつもりではなく、ごく自然に物事を日本と照らし合わせたくてしまうのだ。現地でのタンデムパートナーや、寮の友人らとの会話でも、私は頻繁に「これは日本では…」と口にしていた気がする。

例えば景色のこと。フランクフルトに降り立つ直前に、あの広大な平地と、そこに点在する街の群れを、飛行機から見下ろした時の感動は忘れられない。関西国際空港を発った時に見た景色とはまるで違っていた。ああ、日本じゃない場所に來たんだ、と思わずにはいられなかった。また、少し遠出をする際に最もよく利用したのは電車だったが、街を少し離れると風景は呆れるほど長閑（のどか）になり、いかにドイツが（ゲッティンゲンでは特に）中世の城郭都市の面影を残しているかを、垣間見ることができた。ゼメスターチケットのおかげでハンブルクまで鈍行電車ならタダだと喜び、何度も片道四時間の日帰り小旅行を繰り返した私は、街の外の、退屈でさえある平地を嫌というほど見ることができた。山が多く、少ない平地をいかに有効利用するかに苦心している日本を想うと、こういった街の在り方は贅沢に思えたものだった。

例えば生活のこと。留学を始める前は食生活のことにも心配していた。パンとソーセージとジャガイモ。これしかイメージでできなかったからである。しかし、いざドイツでの生活が開始すると、私はそれが杞憂だったことを知った。ドイツも日本と同じく先進国。スーパーではレジ打ちの店員の態度こそ違っていたが、品揃えは日本とほとんど差はなかった。

もちろん細かいところを見ればキリはないが、現地で買いそろえた材料で日本食を作ることは十分可能だった。むしろ、私は自炊にハマってしまい、寮の面々に和食を振る舞うことも少なくなかった。帰国の際、タンドムパートナーに饞別としてプレゼントされたのが、ドイツのレシピ本だったことも良い思い出である。ほかにも、ゲッティンゲンでは学生のスポーツクラブが数多く存在しており、私もその中のバスケットボールの活動に参加していたのだが、そこでは老若男女が入り混じってプレーをしていた。日本なら力の不平等をなくそうと、少なくとも男女で試合を分けそうなのだが、彼らはそもそも区別するつもりがなかった。何を以て平等と言うのか、私はここでも日本とドイツとを比較していた。

例えば文化。ドイツやヨーロッパが日本と明らかに異なっているのは、キリスト教文化である点だろう。今や無宗教とまで言われる日本に対し、ドイツでは今日もキリスト教による文化形成がある。お祭りにしても、キリスト教に関連したものが多い。クリスマスはその最たるものだ。11月の下旬からの1カ月間、あれだけクリスマスマーケットで賑わっていた街が、24日に火が消えたように静まり返った時には驚いたものだった。だがドイツ人の友人の話によると、彼らはなにも皆がそんなに敬虔な信者というわけではないようだった。友人曰く、クリスマスにだけ教会を訪れるという者も多く、しかも恰好だけの教会詣（もうで）なのだという。私がお話を聞いた時に思い出したのは、日本の初詣だった。神道に対して思い入れも何もない人々が、決められた事のように神社へ足を運ぶ。文化としての宗教という意味合いではこのふたつは大きく異なっているのに、似たスタンスを取っている人はどちらの国にもいると、私はその時に感じたのであった。

例えば人。ドイツに到着した当初は、行き交う人々の、明らかにアジア人とは異なる外見に、私は勝手に気圧されもした。自分だけが違っていると思うとひどく緊張もした。けれど、ドイツの初日に道に迷い、その時に道を尋ねたドイツ人たちが皆、親切に道順を教えてくれ、そしてそのすべてがもの見事に間違っていたことで、私の緊張もほぐれた。ゲッティンゲンで出来た友人たちは、皆それぞれの魅力を持っていて、一人として誰かのパターンと同じということとはなかった。自分達とはど

こか違うものなのだろうと勝手に私が思いこんでいた外国人は、当然のことなのだが、話してみると何ら緊張の必要のない、日本人と変わらない人間だった。

至極有意義な1年間を終えて帰国してから、私はよく訊かれることがある。「日本とドイツで何が違った?」と。これは難しい質問だ。違っていると思えば、あらゆるものが違っていた。似ていると思えば、やはりこの二国は似ていた。私は一番正解に近いと思ってこう答える。「たぶん、空気が違ったんだと思う。」今のところ、この答えで納得してもらえたためしはない。

藤城左和子：長期留学で体験できた様々なドイツ語発音

私はドイツ語の発音が好きである。留学中は生活すべてにおいてドイツ語に浸ることができて、とても嬉しかった。朝起きると、通学している子供たちと送り迎えをする親が楽しそうに話す声が聞こえるし、昼や夕方には大人たちが挨拶を交わしたりお喋りしたりする声が聞こえる。大学周辺に行けば、キオスク (Kiosk) やカフェで話し合っている学生の声が響いているし、街に出れば、老若男女を問わず様々なドイツ語が聞こえてくる。ケルンは外国人が多いので、街ではドイツ語以外にも観光客や移民の英語、トルコ語、ロシア語、スペイン語、もしかしたらアラビア語も聞こえていたかもしれない。もちろん日本語も聞こえてきたし、様々な言語を聞くこと自体が私にとって興味深いことではあるのだが、他の言語が聞こえてきても、ドイツ語の発音が最も心地よかった。

ドイツ語クラスでは、様々な言語の訛りのあるドイツ語を聞かされた。例えば、ロシア語やイタリア語が母語の人は、rを強めの巻き舌で発音するし、中国語が母語の人は、なんとなくイントネーションや子音の発音が中国語風だ。英語が母語でなくても英語を話せる人は、ドイツ語を英語風に発音する人もいた。こうした訛りは面白いが、授業中は訛りのせいでコミュニケーションが取りづらい場面もあった。しかし、この言語が母語の学生はああいう発音をするのだな、と外国人の話し方の傾向が分かり、とても面白かった。

先生たちの話し方もそれぞれ違いがあった。ドイツ語クラスの先生はゆっくりと分かりやすい発音をするが、大学の普通の授業では、速くしゃべる教授や曖昧な発音で話す教授もいた。意見を述べる学生にも、分かりやすい発音の人もいれば、聞き取りづらい発音の人もいた。ドイツ語が母語の学生のための授業であるので、発音が速かったり、地方の訛りがあったりして、ドイツ語学習用のドイツ語との違いを体験できた。

テレビやラジオも、もちろんドイツ語だ。ドイツでは英語が分かる人も多いので英語の番組もあったが、私自身はニュースや好きなドイツ語のドラマを見ていた。ニュースのドイツ語は、ドイツ語クラスの先生が聞き取り練習にすすめてくれた綺麗な発音だ。スピードは速いが、発音自体は聞き取りやすい。ドラマではジョークも多く、喜怒哀楽によるイントネーションの違いを楽しめた。滞在中にミュージカルも数度見に行ったが、そこでも感情による抑揚を聴くことができた。

ネイティブによる訛りも聞くことができた。ケルンにも方言があり、例えば „ich“ は „isch“ のように発音される。店でケルン方言の発音で金額を言われた時に分からないこともあった。旅行中には、ユースホテルで同室になったドイツ人と話したが、南部の方言でかなり訛りが強く、内容がほとんど理解できなかった。日本語にも標準語とかなり異なる方言があるが、母語でないドイツ語では、少し発音が違うと他の言語のように聞こえるということを経験できた。

ドイツ語の発音は固く、怒っているようだとと言われることがあり、実際にドイツ語の発音をあまり好きでないと言うドイツ人もいた。ドイツ語を学んでいる日本人学生は、ドイツ語が格好良くて好きという人が多かったが、私にとってドイツ語は柔らかく優しい言語にも思える。s や t などの子音の発音は鋭いが、 „nein“ や „leer“ など柔らかい発音の単語もある。それに鋭い発音の単語でも、嬉しい時と怒っている時ではその強さが違う。そういった違いを友人との会話中などに聞いたことが、非常に良い経験になったと思う。

このように私は留学中に、ドイツ語の音に注目することが多かった。そのためか人に、私のドイツ語の発音が良いと言って貰える機会も多かった。ドイツ語教材では優れた音声教材も数多いと思うが、録音を介さず直接ネイティブの発音を聴くというのは、最も良い練習だと思う。練

私たちのドイツ留学体験記

習か否かに拘わらず発音自体が好きな私は、ドイツで様々なドイツ語を聴くことができ、幸せな留学生生活を過ごすことができた。今後もドイツ人の友人と続けているタンデムや、テレビドラマや映画などを通して、ドイツ語の発音を楽しもうと思っている。